

2024年3月10日

説教題「石を握りしめる者たちへ」ヨハネ福音書8章1～11、56～59節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは身を起こして言われた。『あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。』(ヨハネによる福音書8章7節)

想像をしてみたいのです。今日のこの場面で、どんな人たちが、どんな思い、どんな表情で主イエスと女性を取り囲んでいたのだろうか。ある人たちは意地悪い笑みを浮かべて「この機会にあのイエスを問い詰めてやろう！」と考え、ある人たちは「律法学者対イエス」の論戦を「これを見逃すわけにはいかない！」と好奇心あふれた表情で集まり、ある人たちは「あの女は何とふしだらなことだろう！」と汚らわしいものでも見る目つきで女性をにらみつけていた…。ところがそのすべての人々が、主イエスの発した一言で姿を消してしまったのでした。いったい何が起こったのでしょうか。主イエスが発した言葉には、どのような意味があったのでしょうか。

そのことを考える前に確認しておきたいのは、律法学者たちが最初に語った言葉、「先生、この女は貫通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せとモーセは律法の中で命じています」という言葉は「正しい訴えか」ということです。「姦通」に関する裁きについては申命記 22 章 22 節以下に書かれていますが、その戒めを要約すると「姦通した男女は二人とも石で打ち殺せ。ただし、女性が同意していないのに男が力づくで女性を傷つけた場合には、女性は生かして男だけを打ち殺せ」となります。つまりモーセの律法は、当時、女性に対して圧倒的に強い力を持っていた男性の側の責任を厳しく問うているのです。であれば、この場面で律法学者たちが「女性しか連れてきていない」のは、そもそも律法を尊重していないこととなります。「姦通の現場でつかまえた」のなら男も一緒にいたはず。その男こそ第一に厳しく責任を問われるべきなのに、男は見逃して女性だけを大勢の人びとの前に引き出して辱めを与える。律法学者を名乗りながらモーセの律法を誠実に実行しようとせず、男に都合よく捻じ曲げて女性たちを抑圧している。神の思いを踏みにじってなお平然としている人々を前に語られた主イエスの言葉であったことを、まず覚えないのです。

律法学者たちが主イエスに「どう考えるのか？」と迫った時、主イエスは身をかがめて指で地面に何かを書き始めました。いったい何を書いていたのか。「神は愛であると書いていたのでは？」など、いろいろ想像されていますが、わたしは「申命記 22 章」の戒めを書いていたのではないかと想像します。「君たち律法学者は、申命記の戒めをほんとうに学んでいるのか？」と問いかける意味で。しかし質問に答えようとしないイエスに苛立った人々がさらに問い詰めると、主イエスは「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が…」と言われて、また地面に続きを書かれたのでした。

この主イエスの言葉は、主イエスに詰め寄っていた律法学者だけでなく、野次馬的にそこにいた人たち、女性に対する嫌悪感情をいだいていた人たち、すべての人への「鋭い問いかけ」となりました。それまで、そこにいたすべての人たちは「女性に対する裁判官」になっていたのではないのでしょうか。私たちは「裁判官」になるのが得意です。「人を裁きたがる」のです。現代ではネットでみんなすぐに「裁判官」になります。しかも無責任な。ごく一部の表面的な情報しか知らないのに「こうだ」「こうあるべきだ」と無責任に裁き、断罪していく。そういう私たちに対して主イエスは「人間は正しい裁判官にはなりえない。私たちを正しく裁かれるのは神さまだけ。人間の裁判では力ある者が自分に有利な情報操作をし、力ない者は正当な弁明さえも奪われていく。そうやって強い者は自分の罪を覆い隠していくけれど、すべてを見抜かれている神の前では誤魔化しは通用しない。あなたはその神の前に立って、なおこの女性に石を投げつける権利を主張するのか?」。そのように主イエスの問いかけは、そこにいたすべての人を「神の前に立たせる問いかけ」となったのです。この主イエスの厳しい問いかけの前に、人々は黙ってこの場を立ち去るほかなかったのです。

人々が立ち去った後、主イエスと女性だけが神殿の境内に残されます。主イエスは彼女に語りかけます。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」。この言葉はどういう意味なのでしょう。わたしはこう受け止めます。「わたしもあなたの裁判官にはならない。あなたを正しく裁かれるのは神のみ。その神は十字架であなたの罪をすべて引き受けてくださる愛なる方。その愛なる神の前に立ち、これからは神の愛に向かって正しく生きていきなさい」と。

そもそも「罪の裁き」とは何でしょうか。「断罪して、責任を問い、命を奪うこと」でしょうか。そうではなく「罪を明らかにしつつ、その人を生かすこと。その人が神と隣人に向かって生き直すことができるように導くこと」でしょう。「真実な裁き」は人を殺すのではなく、真実に生かすものです。ヨハネ8章で主イエスのもとに女性を連れてきた律法学者をはじめ、人々はその「裁きの本質」を見失っていました。その人々は皆、手に石を持って、女性を裁き、さらにはイエスをも裁いて、断罪し、命を奪おうと考えていた。けれども主イエスはその人々の過ちを見抜かれて、人々が手にしていた石（人の命を奪うための石）を手放させ、一人ひとりが神の愛なる裁きの前に新しい生き方を見出していけるように、導かれたのです。

先日この箇所を朝の祈禱会で分かち合った時、ある方が「主イエスはここで、人々が手にしていた石を手放させて、新たな罪を重ねることから救われたのではないか」と言われました。今日も主イエスは、誰かの裁判官になり、断罪し、石を手に握っているような者たちを、その罪から救うために祈っておられます。十字架において私たちを真実に生かす神の愛をあらわされた方こそ、私たちを正しく裁き導く方なのです。